

守り伝える古民家

旧大石家住宅 移築10周年!!

平成8年8月15日発行の下町文化173号で「よみがえる古民家 旧大石家住宅移築工事完了!! 9月から一般に公開」という見出しで紹介してから早いもので10年が経過しました。これまで“あんなこと”“こんなこと”いろいろありましたが、皆様のお陰で10周年を迎えることができました。今号では、更なる10年間に向けて、旧大石家住宅のこれまでを振り返ってみます。



冬:松飾り



夏:七夕



秋:特別公開



春:ひな祭り

下町文化

NO. 234
2006.7.10

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL:(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

守り伝える古民家
旧大石家住宅移築10周年
囲炉裏端(大石家日記)特大号

《第2弾!》
芭蕉記念館開館25周年特別展
芭蕉前後の俳諧
- 館蔵資料を中心として -

区外資料調査報告
安政の大地震と羅漢寺復興計画

江東今昔(7)
文化財掲示板

解体から再築・公開

旧大石家住宅は、江戸時代の民家建築を伝える区内唯一の建築物です。もとは八郎右衛門新田(東砂6〜8丁目付近)の中央を流れる舟入川の南端の掘留に面して建てていました。数々の災害を免れ、この地域の民家の姿を現在まで残す大変貴重な建築物であることから、平成6年に区の有形文化財(建造物)に指定されるとともに解体調査を行い、同8年に現在地に移築復元されました。



茅を取り除いた大石家

解体時の大石家住宅は、茅葺屋根が鉄板で覆われ、土間の一部は改造して台所と玄関になっていました。再築にあたっては、できるだけ古い形にもどすことを目指しました。もとの建築材をできるだけ使用することもそのひとつです。どうしても新しい木材を使わなければならない場合には、使い込まれた風合いができるように加工しました。柱の一本一本をよく見ると、継いだ痕跡が見つかります。

それでは住宅の見所を簡単にご紹介していきます。中に入るとまず囲炉裏が目に入ります。部屋の中央ではなく



新しい木材(手前)を縫いだ柱

端のほうにありませんが、解体調査の時に床下から囲炉裏の跡が見つかった

たことからこの場所に再現しました。次に上を見上げると屋根裏が見えます。

屋根裏には箆笥や長持ちが保管されています。大石家住宅の建てられていた八郎右衛門新田を含む砂村一帯は、つねに水害に悩まされてきた地域で、浸水時には一時的に屋根裏で生活できるように、「登梁形式」という屋根裏を大きく使える構造になっています。

土間を見回すと、桶や糞のほかに、見慣れない道具が置いてあることに気が

事件簿

ロケット花火投げ込まれる

以前、旧大石家の庭にロケット花火の燃えカスがちらばっていたと、朝、ボランティアさんから通報がありました。幸い大事には至りませんでした。大変危険な行為です。交番に届け、パトロールしてもらうようお願いするとともに、近所に住む友の会の方々にも目を配っていただきました。その結

が付きまします。これは大石家で使っていた海苔養殖の道具です。現在の東砂周辺では明治の末頃から海苔養殖が始められました。大石家でも小松菜やつまみ菜などを栽培する畑作と海苔養殖を行う半農半漁の暮らしをしていました。

外に出て家の周囲を廻ると、北側に屋根から一段下げて庇がつけられています。これは、囲炉裏で使用する薪の保管場所です。茅屋根の保存には囲炉裏での燻煙は欠かすことができません。また、囲炉裏



海苔養殖の道具

以外では火気の使用が禁止されている旧大石家住宅で、冬期

果、このような悪質なイタズラはなくなりましたが、文化財保護もやはり地域力が大切だとつくづく感じました。

いたすらカラス

再築後間もなく、屋根の茅をカラスが引き抜いていることがわかりました。カラスは巢の材料として茅を持っていきますが、遊びで引き抜くこともあるそうです。そこで登場したのが写真の「センサーバード」です。センサーが鳥



下屋の様子

の暖房として薪の確保は大きな問題です。10年の間に、薪が少なく心細い

冬を過ごしたこともありましたが、最近では公園の剪定木を定期的にもらえるように計画しています。さらに裏手から庭に廻ると、植え込みの中に卵形の石が置いてあります。正面にはうすらと「さし石」と刻んであるのがわかります。これは、区内にくつかある力石のひとつで、解体の時に柱の下から発見されたものです。



さし石

の影を感知すると撃退音を出すというのですが、カラスが一番嫌ったのは、毎日囲炉裏から立ち上る煙や庭で動く人影ではないでしょうか。旧大石家の



センサーバード

屋根を見ると、カラスが引く抜きかけてそのままになった茅が飛び出しているのがわかります。

公開日

土・日・休日の旧大石家住宅の公開日には平成8年9月の公開から昨年度までに約5万7千余名の方が見学に訪れました。なかには外国から旅行で来られた方も含まれます。仙台堀川公園内という立地条件もあり、ウォーキングの会・自然観察の会・写生のグループといった団体も多く訪れます。公開日はシルバー人材センターの会員の方に交代で管理していただき、入館者数を記録していますが、桜の季節と秋の砂町地区まつりの日には、入館者が数えられないほど賑わいます。

旧大石家住宅友の会

貴重な文化遺産である旧大石家住宅を後世まで残すために、移築と同時に、平日の保存活動を行うボランティア「旧大石家住宅友の会」が発足しました。

友の会では、一緒に活動していただける方を募集しています。区内在住で平日の活動が可能な方、古民家の保存や地域の歴史・文化財に興味がある方、旧大石家住宅の保存活動に参加してみませんか。申込み用紙は区役所6階文化財係と旧大石家住宅に置いてあります。不明な点は文化財係までお問い合わせください。

(3647)9819

教育委員会生涯学習課文化財係

写真で振り返る友の会の10年

旧大石家の10年間は友の会を抜きにしては語れません。そこで、これまでの活動を写真とともにご紹介します。

初めての・・・



平成9年1月6日、移築後初めてのお正月を迎えました。砂村囃子睦会の方々の獅子舞で昔とのお正月を再現しました。文化財防火デーに先立つ1



月24日、城東消防署の指導のもとで、初めて消火訓練が行われました。写真は発炎筒を焚いて臨場感を出した主屋へ消火器を持って駆けつける会員の皆さんです。

特別公開と学校見学

秋の文化財保護強調月間の期間中には平日の特別公開があり、会員の皆さんに解説をお願いしています。昨年からは始めた、幼稚園・保育園の年長児を対象としたお話しは大変好評で、たくさんのお園児が訪れました。古民家で聞く昔話は一味違った趣があり、みんな

が伝わってきます。

日誌を開くと「ウグイスの初音」が



聞けたことや毛虫退治の記載があります。夏には庭でせみの抜け殻を見つけてきました。旧大石家の庭は都会の喧騒を忘れさせてくれる空間です。

年中行事



旧大石家住宅では雛飾りや五月飾りなど昔から伝わる年中行事を再現しています。写真は、



一年の締めくくりはやはり煤払いです。毎日囲炉裏に火を入れて



この期間は小学生の団体見学でも賑わいます。家の中を自由に見学してもらいますが、子どもたちの予期せぬ質問に四苦八苦しながらも楽しいひとときを過ごしています。

研修会

去る5月24日、友の会研修会で横浜市の都筑民家園と横浜歴史博物館を訪れました。都筑民家園は、江戸時代中期の民家旧長沢家住宅を移築復元したものです。国指定史跡「大塚歳勝土遺跡」公園に隣接し、たくさん緑に囲まれています。管理は「都筑民家園管

理運営委員会」が横浜市の委託をうけて行い、民家が市民共有の文化遺産として充分活用されるよう、さまざまなイベントを行って



ています。こうして他の地域の古民家を見学することは、会員の間でも旧大石家住宅の保存と活用について新たな展開を模索していくよい題材になります。11年目からの友の会にますます期待できそうです。

自然に親しむ



庭の小さな畑ですが、会員の皆さんの丹精でこれまでに亀戸大根やネギ、小松菜、枝豆をはじめ四季の草花を栽培しました。すくすくと育つ様子を眺めるのは楽しみのひとつでもあります。住宅の景観を豊かにしようとする気持ち

芭蕉前後の俳諧

—館蔵資料を中心として—

平成18年7月13日(木)～12月17日(日)まで

江東区芭蕉記念館は、昭和56年(1981)4月19日の開館から今年で25周年を迎えました。これを記念して芭蕉記念館では、さきに4月27日から7月9日まで開館25周年の記念特別展を開催し、好評のうちに終了することができました。これをつけて記念館では、第2弾として館蔵品をもとにした特別展を開催します。今回の展示では、62点のうち、初公開の資料11点が含まれ、大変貴重な展示です。

芭蕉以前の俳諧は、里村家を中心とした連歌や、松永貞徳や北村季吟の貞門俳諧、さらには西山宗因を祖とする談林俳諧をへて、芭蕉の蕉風俳諧へと至ります。そして芭蕉は、俳諧を文学の領域にまで高めることとなります。しかし芭蕉の没後は、次第に俳諧は低俗化の傾向を迎えていくことになり、蕪村らの登場を待つこととなります。今回の展示では、その芭蕉の時代前後の俳諧に焦点をあてています。とくに初の展示となる大淀三千風の巻子は、タテ32・3cm×ヨコ155・5cmで、58行に及び内容です。三千風は、寛永16年(1639)～宝永4年(1707)、69歳。伊勢国射和の生まれ。談林系統の俳諧師として

知られています。が、特定の師を持たなかつたとされています。31歳の時、俳諧師となるため松島に赴き、のち仙台に約15年滞在。延宝7年(1679)3月5～6日、矢数俳諧に挑戦し、2800句の独吟を成就。追加200句を加え、仙台大矢数として刊行、こ



三千風筆巻子(部分)

れが三千風の号に由来します。天和3年(1683)4月には、『日本行脚文集』の旅に出発し、元禄2年(1689)までの7年間、諸国の俳人と風交を重ねた人物として知られます。

展示の巻子は、この三千風が『日本行脚文集』の旅中に故郷の射和村を天和3年10月に訪れた折の事を書き連ねたもので、翌天和4年の元旦に書き上げたものです。『日本行脚文集』には、このときの事を伝え、「予も縁起一軸す、略す」とあり、それがこの巻子のことと思われまふ。全体は52行の前書に3句を添えています。そして、最後に「日本修行寓言堂 大箭数大臣 三千風」とあります。この矢数俳諧は、はじめ西鶴が1日に1600句で記録を作り、この記録を破つたのが三千風で、西鶴は延宝8年夏に4000句を作り記録を塗替るという経緯があります。

しかし、それから4年後のこの巻子に、三千風がいまだ「大箭数大臣」と称していたことは注目されます。この年の貞享元年6月、西鶴は、住吉の社頭で3回目の矢数俳諧を興行し、実に一昼夜で2万3500句の偉業を達成するのです。いずれにしても、この巻子は、当時の三千風の動静を知る貴重な資料といつことが言えます。また、西山宗因の「小家なれど」句



宗因筆「小家なれど」句短冊

短冊は、宗因が「一幽」の別号を記した極めて珍しいと言われるものです。今回の展示では、このほかに里村家の連歌師から、貞徳・季吟、蕉門の俳人、そして享保期までの俳人などを取り上げています。この機会に是非御覧ください。

(横浜文学)

芭蕉記念館

開館時間

午前9時30分～午後5時

(4時30分までにお入りください)

展示室休室

毎週月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料

大人100円・小中学生50円

交通

都営地下鉄新宿線・大江戸線

森下駅下車 徒歩7分

問合せ

江東区芭蕉記念館

江東区常盤1 6 3

☎03(3631)1448

文化財ガイド員と歩く下町いっしょ

少し前の話しになるが、3月28日は、前日の天気予報とは違い、薄日の差す穏やかな日であった。この日は、千葉県から来た京葉園遊会ハイキングクラブの20名と、森下から清澄庭園まで約4kmのコースを半日かけて、桜を見ながら文化財をめぐり歩いた。今年の桜は例年より早く、この日はちょうど七分咲きで見頃であった。案内したのは、文化財ガイド員の岡本さん、黒羽さん、木ノ本さんの3人で、いずれもガイドのベテランである。



万年橋の解説をするガイド員の岡本さん・木ノ本さん

みなさんは文化財ガイド員をご存知ですか？ ガイド員とは、江東区教育委員会が認定した、区の歴史と文化財についての解説を専門とする人たちです。彼らはいずれも初級・中級講習会を受講し、協力員を経験しており、中には10年の協力員任期を満了した猛者もいる。また、日頃から自主グループで区内の歴史や文化財を勉強している人も多く、その知識と経験は豊かだ。

話しを戻そう。今回のガイドは区外からの依頼であったが、ガイド員の3人に気負いはなかった。各ポイントでの解説は、それぞれが独自に調べた資料をもとに、小道具を使いながら分かりやすく説明していく。各人の個性が光る解説は、ガイド員の腕の見せ所だ。

新大橋や万年橋の浮世絵などを巧みに使い、朗々と説明するのは岡本さんの持ち味だ。参加者からは「浮世絵で描かれている富士山は、どの辺にみえるの?」といった質問が飛び、浮世絵と同じポイントからみえる風景を比べるのは、文化財めぐりの面白さのひとつだ。黒羽さんは、平岩三枝の小説『御宿かわせみ』から小名木川を小舟で

下ってゆく情景を引用して、江戸時代の深川情緒を思い起こさせる。ほとんど流れのない小名木川に、小さい舟がゆったりと進むのが、^{まぶた}に浮かぶ。一方、切絵図が描かれたハンカチを大きく広げて、深川寺町と言われる由縁を熱く語るのは木ノ本さんだ。街のうつり変わりが激しい江東区だが、深川地域には昔と変わらない場所に、今でも多くの寺院を見ることが出来る。

ひとつの解説ポイントで説明できる事柄は、実は非常に多い。これを全部話したいところだが、交通量の多い場所では、安全面から長く解説することはできない。そこで文化財の解説は1つか2つに絞って話すのだ。また、案内する側としては、地元の面白いところ、良いところを沢山知ってもらいたいのが人情である。しかし、「これが一番、難しいですよ」と木ノ本さんは苦笑する。

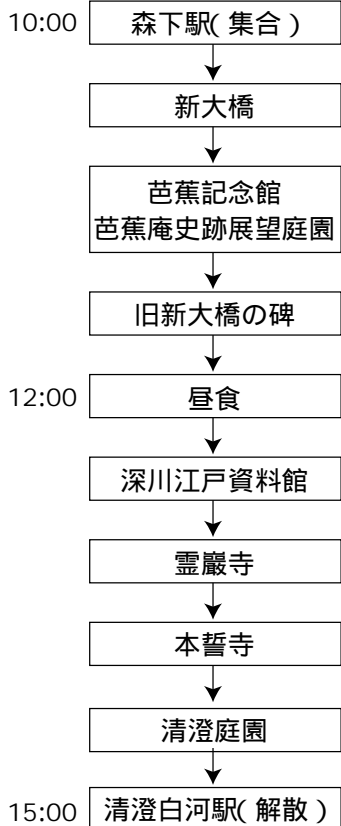


桜の咲く芝罘河岸を歩く

この日は、時間の都合で見学をカッとした場所もあったが、ガイドは大変好評であった。案内も終わり、解散する時には、参加者から「楽しかった」「また別のコースでガイドを頼みたい」という声があがった。参加者からの拍手とお礼の言葉に、案内をした岡本さん、黒羽さん、木ノ本さんの3人は少し照れくさそうに、そして誇らしげであった。

(取材 文化財専門員 小川祐司)

今回のコース



安政の大地震と羅漢寺復興計画

今ひそかに大島ブームが到来しているようです。5/22〜6/12日に行いました第47回地区別講習会は大島地区をテーマとし、毎回100名を超える参加者がありました。その中でこんな質問がありました。

「大島の災害について教えてほしいのですが、」 (Hさんより)
 「江戸時代の羅漢寺についてもっと詳しいことがわかりませんか？」 (Tさんより)

残念なことに区内には古文書はごくわずかしか残っていません。ご存じのように関東大震災と東京大空襲による被害や、近代以降の急激な都市化によってその多くが焼失、散逸してしまっただからです。それゆえ教育委員会では区外にある関係史料を広く蒐集し、区の歴史を復原しようとして試んでいます。さて前置きが長くなりましたが、昨年8月に史料調査に訪れた柳川古文書館で先の質問に答えられそうな史料を見つけました。大島ブームをさらに盛り上げるべく、タイトルに掲げたテーマでお話ししたいと思います。

A 阿部伊勢守殿御渡候

御書付寫言通、相違候之間、被得其意無滞滯順達、從届堀伊豆守方江可被相返候、以上、
 十月朔日 大目付

細川越中守殿
 藤堂和泉守殿
 松平内蔵頭殿
 宗対馬守殿
 津軽越中守殿
 松平土佐守殿
 此方様
 佐竹右京大夫殿
 松平大蔵(備前)大輔殿
 右留守居



柳川古文書館

B 大目付江
 本所 羅漢寺

武蔵
 上総
 下総
 美濃
 信濃
 越後
 右、諸堂舎其外地震

大名家名	国/藩(石高(万))	本所深川に所有する屋敷地
細川	肥後/熊本(54)	平井新田(東陽4)に抱屋敷
藤堂	伊勢/津(32)	南本所大川端(墨田区両国1)
松平(池田)	備前/岡山(32)	不明
宗	対馬/府中(10)	深川六間堀(墨田区千歳3)に中屋敷
津軽	陸奥/弘前(10)	柳島村(現亀戸3)に抱屋敷
松平(山内)	土佐/高知(24)	八右衛門新田(北砂2)に下屋敷
此方(立花)	筑後/柳川(10)	深川に下屋敷(場所は不明)
佐竹	出羽/久保田(20)	柳島村(亀戸1・2)に中屋敷
松平(毛利)	周防/萩(36)	深川鶴歩町(東陽6)に町並屋敷 砂村新田(南砂2)に抱屋敷

表1:文書Aの廻状順

二而相潰候付、再建為助成右六ヶ国勸化御免、寺社奉行連印之勸化状持参、役僧・役人共当辰十月より来ル申九月迄御料・私領・寺社領・在町共可致巡行候間、信仰之輩者物之多少二よらず可致寄進旨、御料者御代官、私領者領主・地頭より可被申渡候、
 辰九月

右之通可被相触候

これは2通の文書を一紙に書き写したものです。Aは大目付から大名家留守居役への廻状、Bは「阿部伊勢守

殿」から大目付への書付です。このように藩では幕府からの公文書を複写しておきました。

まずAの内容ですが、阿部伊勢守から出された書付の写しに訂正があるので、その旨を確認し、滞りなく回覧して、最後は堀伊豆守へ返すように、とあります。末尾に記された大名の留守居に通達されました。そして訂正済の阿部伊勢守の書付がBなのでしょう。

Bを見る前に両文書がいつのものなのかを考えてみましょう。Aは10月1日、Bは辰年9月で、内容から両文書とも同年のものと見て間違いありません。ただ、辰年といっても江戸時代には20回以上もあります。そこで文書中に登場する人物に目を向けてみましょう。Aによれば最後に堀伊豆守まで返すようにとあります。Aの差し出しは大目付ですので、堀伊豆守は大目付堀利堅(在任期間1845〜58)であることがわかります。そして大目付は老中の管轄ですので、冒頭の阿部伊勢守は幕末期の老中阿部正弘(在任期間1843〜57)に比定できます。そして両者の在任期間中で辰年に該当する年を探すと安政3年(1856)になります。

それではBを見ましょう。内容は、昨年の大地震によって羅漢寺の諸堂舎が倒壊してしまっ



名所江戸百景
五百羅漢さざえ堂(広重)

堂舎再建の助成として右の6力国での勸化(勸進行為)を認める。寺社奉行が連印した勸化状を持参して役僧・役人が今年の10月から来年の9月にかけて勸進する。この際、幕府領・私領・寺社領・町方を問わず廻るので、信仰する者は額の多少に関わらず寄進するように。この旨を幕府領は代官が、私領は各領主(藩主など)が申し渡すように。と書いてあります。

ここでいうところの昨年の大地震とは、安政2年10月2日に起こった安政の大地震のことです。この地震は関東大地震に匹敵し、倒壊家は1万戸を越え、死者は町人だけで4千人にも及びました。『武江年表』に羅漢寺が倒壊した記事が載っています。

五ツ目五百羅漢寺本堂大破、左右の羅漢堂並びに天王殿(布袋、四天王、関羽を安ず)潰れ、三匠堂(さざえ堂といふ)大破に及べり、この地震で本堂や羅漢さんが祀られ



江戸名所道戯尽廿六
五百羅漢さざえ堂(広重)

ている東西の羅漢堂、そして羅漢寺のシンボルともいえるさざえ堂も潰れてしまったことがわかります。

この羅漢寺復興の助成として、武蔵・上総・下総・美濃・信濃・越後の6力国で勸進する許可を老中から出されましたが、なぜそのような内容の文書が立花家に残っているのでしょうか。

この廻状の宛名を表1にまとめました。みな10万石以上の国持ち大名ですが、これらに共通するのは外様大名であること、それからほとんどすべてが本所・深川や亀戸・大島・砂村に屋敷を所有していることです。立花家も深川のいずれかに下屋敷を所有していたことが別の文書からわかります。

さらにこの書付は、本所・深川地域の大名屋敷に勸進が何うことを通達する一方で、上記の大名にも喜捨を求めていると思われる。「信仰の輩は物の多少によらず寄進致すべし」といわれて、本所五ツ目の名刹羅漢寺の周辺に屋敷を持つ大名が出さないわけには



東都名所 五百羅漢さざえ堂(広重)



東都名所 五百羅漢さざえ堂(広重)

さで、史料にもどりますと、安政の大地震で倒壊した羅漢寺を復興しようとしたが、結局は以前のような隆盛は取り戻せず、羅漢寺は冬の時代を迎えることになるのです。

いかにいでしょう。

黄檗宗の寺院天恩山大阿羅漢寺は元禄期に開基松雲元慶が等身大の羅漢像を安置したのに始まります。3代象先によって羅漢堂と三匠堂が建立されました。三匠堂は別名「さざえ堂」と呼ばれる3階建ての建物で、時計回りに3回転して登ることからこの名がつけました。内部には観音札所の観音像が配置されており、さざえ堂を一回りするだけで西国三十三番、坂東三十三番、秩父三十四番の百ヶ寺を参詣したことになるました。実に便利な参詣システムですが、さざえ堂は同じ場所を2度通ることはないという非常におもしろい構造をとっていました。これが庶民に受けて羅漢寺は大いに賑わい、錦絵に描かれました。



長善寺さざえ堂



曹源寺さざえ堂

寺院名	所在地(建立当時)	建立年代	備考
羅漢寺	東京都江東区	安永9:1780	安政2年(1855)地震で倒壊、明治8年(1875)取壊し
能持院	栃木県茂木町	天明5:1785	明治4年(1871)台風で倒壊
成身院	埼玉県児玉町	天明5:1785	明治44年(1911)再建 現存
曹源寺	群馬県太田市	寛政5:1793	現存
正宗寺	福島県会津若松市	寛政8:1796	現存
梅園院	東京都台東区	寛政11:1799	完成直後に取壊し
長禅寺	茨城県取手市	享和1:1801	現存
妙音寺	群馬県桐生市	1820-40頃	天保13年(1842)焼失
長勝寺	青森県弘前市	天保10:1839	現存
西新井大師	東京都足立区	天保11頃:1840	明治時代に再建、現存
観音院	埼玉県小鹿野町	18世紀後半	明治26年(1893)焼失
竜照寺	新潟県新潟市	明治8:1875	焼失
大栄寺	茨城県結城市	未詳	現存せず

表2:全国さざえ堂一覧

羅漢寺で初めて建立されたさざえ堂は各地で次々に建てられました(表2)。残念ながら羅漢寺のさざえ堂は明治8年(1875)に壊されましたが、群馬県太田市の曹源寺や茨城県取手市の長禅寺のさざえ堂が羅漢寺のものに似ているそうです。折に触れて訪れてみてはいかがでしょうか。

(文化財専門員 赤澤春彦)

江戸今昔(7)

昔からここにあった富士塚

左の古写真は、昭和30年ごろに、亀戸9丁目にある浅間神社の社殿を正面から撮ったものです。石造の鳥居の下から敷石が社殿に向かって続いています。社殿は塚の上にあり、石段を登って参拝することになります。

塚は、富士塚と呼ばれる、富士山を模した小型の人造山です。区内にはこの「亀戸の富士塚」の他に、富賀岡八幡宮(南砂7)に「砂町の富士塚」があります。いずれも、区の指定有形民俗文化財となっています。また、富岡八幡宮(富岡1)の富士塚は近年再び築かれたものです。



亀戸の富士塚は、今まで移転したことはなく、昭和54年度から始まった亀戸・大島・小松川地区の再開発をもちり越えました。しかし、様子は大きく変わりました。社殿は塚から移転し、塚のあるところは公園となりました。



現在の亀戸の富士塚
(亀戸浅間公園内)

古道

さて、古写真を見ると、鳥居の手前に道があることに気づきます。この道は古く、延宝7年(1679)の「増補江戸大絵図」にも描かれています。道を往來する人を案内していたのが、かつて豎川の六之渡し付近にあった「富士せんげん道道標」(享和元年・1801)です。道標の正面には、「是より右 富士せんげん 亀戸天神 六阿ミだ あさくさ 道」とあり、豎川北岸から、浅間神社、亀戸天神、六阿弥陀常光寺、浅草に通じる道を示しています。古写真の左側方向を行くと、水神社(亀戸4)に行き当たり、そこで二股に分かれた道の左



富士せんげん道道標
(浅間神社内)

職人味を
江戸気分を
味わおう!

「深川体験わーど」でモノ作り体験

期日 7月16日(日)
会場 森下文化センター(森下3 12 17)

すでに6月11日号の区報でもお伝えしているように、伝統工芸の体験が行われます。職人さんのていねいな指導のもとで、江戸の職人気分を味わってみませんか。

申込 電話にて文化財係まで(先着順)
電話(3647)9819

締切 定員になりしだい
費用 有料

内容 左の通り

午前の部(10時~12時)

江戸切子・麻の葉模様

締切

定員12人・費用1000円

更紗染・東海道五十三次「箱根」

定員7人・費用2000円

無地染・しぼり染めスカーフ

定員10人・費用2000円

木彫刻・定員計15人

締切

木彫刻・定員計15人

桐の文箱 費用2000円

菓子皿 費用1000円

コースタ 費用1000円

江戸表具・菓子盆

定員6人・費用600円

建具組子・ミニ衝立

定員20人・費用1500円

いずれの体験も、汚れてよい軽作業のできる服装でご参加ください。

手を行くと亀戸天神(亀戸3)に、右手を行くと常光寺(同)、そして北十間川に沿って浅草へと至ります。現在、大部分の道をたどることができませんが、浅間神社のあたりはできなくなりました。

古写真は、かつての浅間神社のすがたをとどめる写真であるとともに、江戸時代から親しまれてきた古道を記録した写真でもあるのです。

計報

江東区登録無形文化財(工芸技術・木工)保持者の川又栄一氏は、去る5月13日に逝去されました(71歳)。氏は、明治時代中期から続く桶結師「桶栄」の3代目でした。慎んで追悼の意を表します。